



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30
 例会場：卯辰山・ホワイトハウス
 事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所
 TEL <0762> 63-1151
 会長：越野 民男 幹事：浅田 豊久
 情報委員長：清水 忠

1976・3月4日

第60号



国鉄の現状と問題点

金沢鉄道管理局長 三坂 健康氏

巨額の赤字を抱え、労使紛争の絶え間ない国鉄に対して、“国鉄には技術はあっても経営はない”という外部からの厳しい批判がある。

しかし新日鉄やトヨタに数倍する我国最大の巨大事業集団でありながら、経営の自主性も製品価格決定の自由もなく、反面公務員同等の person 費を払わねばならない現在の国鉄の企業体制を、私的企業と同じ視座から観ることには誤りがある。

国鉄法第1条は、鉄道事業の発達によって国の福祉を増進することを、国鉄の目的として明確にうたっている。国鉄の本質は、健保や食管と同様に、国民生活の福祉にあり、利潤の確保は二義的なものといわねばならない。

そういった国民の足として十分に機能しているかの点から観れば、わが国鉄は、年間70億の輸送量を誇る世界一の技術と、過去5ヶ年の労働力15%減。輸送量3倍増の合理化実績を以て、むしろ高く評価すべきである。

だが、問題は労使の紛争である。私企業の労使には一蓮托生という運命共同体の意識がある。国鉄には労使の乖離^{かいり}はあっても人間的つながりはない。その乖離^{かいり}を、その不満を、国民を人質にとって解決しようとするところに、国鉄の労使問題の根の深い難しさがある。

しかし、国鉄の労使はその難しさを乗り越えねばならない。何故なら国鉄は、国民の足であり、国民の福祉そのものであるから。



—金沢北RC例会卓話から—
 (文責 清水 忠)

辰年会員 今年の抱負を語る “新春に思う”

中村 省三



本年の辰年は私の6回目の廻り年になる。今更ながら長命に驚いているが、然し今日では男の平均寿命も延びたので、どうにか世間の仲間入りが出来たかと感激しています。

昔は人生50年と云った事を考えると20年余お釣りを貰った気になる。

実は私の父は61才（還暦）母は78才で亡くなっていますので、せめて父の年迄は生きなければ不幸になると考えつ、今日に至っていますが、段々慾に慾が重り、こんどは母の年令迄何とか生き度いと念願しています。

ただ私が不思議に思う事は昔は今日より環境もよく凡ゆる公害等の心配もなかったのに平均寿命が短かったかと思いますが、之は急速な医療機関の進歩・発達と食事等の改善によると云われる方もありますが、又一つには神仏の加護もあるかと思ひ、一日一日を大切に感謝して過ぎなければ申し訳がないと考えています。

しかし其の有難さを思うにつけ終戦後我々戦友はソ連に抑留されて、次から次へと栄養失調や厳寒の為、お互が帰還を夢見ながら散った人々の心境を察する時、胸の痛む思いがする。

我々石川県の同志は帰還と同時にエラブカ観音像を作り、毎年旧盆には必ず法要を営んでいますが昨年は丁度終戦30年になるので、同志相計り会員数は少ないが、国会議員の御臨席を仰ぎ質素ながら盛大に慰霊祭を行い、幾多戦友の霊に心から祈願した次第であります。

我々は生涯この法要は続ける積りでいます。

“I am third”………という言葉が濠洲にある。

“私は3番目”と訳すが、その内容は

- ① 先ず神を考え！
- ② 世の中の人々のことを考え！
- ③ 最後に自分のことを考える

（安野パストガバナーの書から）

“南米で過したわが辰年の新春”

木島 光仁



今年の正月、丁度南米のサンパウロで過しましたので、その時に感じました事を書いてみたいと存じます。

昨年12月31日は、ブラジル、サンパウロで日本の紅白歌合戦が初放映された年でもあり、可成り日本ブームづいていたわけですが、ブラジルのエネルギー相（鉱業動力大臣）が日系二世の植木(39才)氏であり、今迄にコーヒーに代表される農業国を漸次工業国に転換すべく大車輪で、方向転換している様子が、我々の様な一旅行者にもひしひしと分る様な気がします。

例えばブラジリア首都の建設、アマゾン地域を貫通する高速道路、アマゾン川のマナウスに於ける工場開発、日本企業でも三洋電機、本田技研、又ベレンに於けるアルミニウム生産工場、その他永代産業等の進出の話を知ると、日本の企業のエネルギー、又ブラジルそのものの持つ若い国のエネルギーを大いに「はだ」で感じられました。

又一面、コーヒーの霜害により不作にも負けずサンパウロの活気に満ちた大高層ビルの町並、又日本人町の大きさ（日本国外に於ける最大の日本人街）、又一方リオデジャネイロのカーニバルに代表されるような底ぬけに明るい南国の人々、何をとってみてもエネルギーに満ちあふれている様に感じとれます。

一方エネルギーショックで2年以上に及ぶ不況で政府も企業も大息吐息の我国に比べて大変な国民性の違いを肌で感じました。併し日本人の一人一人をとって見ればこの不況にもかかわらず、年末年始の海外旅行に見せる会社員、OL等のエネルギー、之は又世界一のエネルギーではないでしょうか。国民一人当りの所得がのびた事にもよりまじょうが、昔の様に若い会社員、OLはもらった給料を親やその他に入れる必要もなく、まさに全世界を活歩している姿は、大変頼もしい限りであります。他の貧しい国々を見あると、果してこれで良いのだろうかとも反省させられます。福祉国家建設をと、政治家も役人も我々皆が口ぐせの様に申す世の中ですが、権利のみの追求に走り義務の伴はない福祉、之は本物でしょうか。北欧、イギリス等が手本の様に云われておりますが果して老人の自殺率の一番多い様な事が福祉と云えるのでしょうか。

それらの福祉国家を見て廻って来ても、我々の肌で感じるエネルギーは殆んどありません。まさに老境に入っている感じです。それに比べてブラジルの活気に満ちた感じ、貧しい人も大変に多く北欧、日本に比べて大変遅れていると云われるブラジルのあの活力はどこから出る、いや発散されているのであろうか。

日本自身もだんだんと老境に入りつつあり、北欧の様に活気なき、フリーセックスの福祉国家のようになるのであろうか、等々と考えておる内に、国の進歩、活力と同じ事が我々個人にも云えるのではないかと考え及び、個人でも余りにも形式にとらわれた老大国や、北欧の様な福祉国家の行き方ではなく、何時までも若々しく活力、エネルギーに満ちあふれた一生を送りたいものと考え、南米（ブラジル）での年越をした次第であります。

